

標本の採集属性

ふじのくに地球環境史ミュージアム 準教授

早川 宗志

自然史博物館には、植物、昆虫、剥製標本、骨格標本、液浸標本、岩石、化石など様々な種類の自然史標本が収蔵されている。収蔵されている自然史標本の属性は、各博物館の設立経緯や由来、地域性によって大きく異なる。例えば、旧帝国大学などの由緒ある歴史を持つ大学博物館等には、全国各地や海外などからの多くの貴重な標本が収蔵されている。その一方、地方行政法人が所管する県立博物館等の場合、その地域で長年活動されてきたアマチュアの方からの寄贈標本を主体とした収蔵コレクションであることも多い。本稿では、静岡県立のふじのくに地球環境史ミュージアムを例に、収蔵される維管束植物（図-1）の採集属性（採集地・採集年・採集者）を解析した結果（早川・杉野 2023）について紹介したい。



図-1 ふじのくに地球環境史ミュージアムの植物収蔵庫の収蔵状況。一部のさく葉標本は、寄贈者が管理していた茶箱に入れたまま保管している

ふじのくに地球環境史ミュージアムは2016年3月に開館した地球環境史をテーマとした自然系博物館である。搬入済みの自然史標本は、開館時に約50万点で、現在は100万点を超えており（渋川ら 2022）。収蔵庫に所蔵されている自然史標本の属性を把握することは、地域の自然史の解明および収蔵庫の特性把握、今後の収集保管計画の立案をする上で重要である。

植物標本の採集属性の解析には、2022年8月26日時点の所蔵標本情報（161,221点）を使用した。分類群（種および亜種、変種、品種、雑種、栽培品種）数、採集年ごとの採集者別標本点数、都道府県ごとの採集者別標本点数を算出した。解析の都合上、標本点数が少ない採集者および複数名による採集は「その他」として扱った。なお、当館所蔵の植物標本のうち、湯浅保雄コレクション（約9万点）は情報のとりまとめが叶わなかつたため除外した。

解析に用いた標本（161,221点）の内訳は、静岡県産が109,232点（解析標本全体の67.8%）、日本産（静岡県以外）が46,311点（28.7%）、国外産が3,132点（1.9%）であった（表-1）。採集点数が多い都道府県は、静岡県が最も多く、その次に、静岡県と県境を接する各県および静岡県とは地理的に離れた地域（北海道・鹿児島県）の点数が多い傾向があった。採集者別に静岡県で採集された標本をみると、全国的な調査を実施していた杉本順一氏は54.6%、シダ植物を対象にしていた志村義雄氏は77.8%、静岡県の植物を対象としていた杉野孝雄氏は90.5%の標本が静岡県で採集されていた（表-1）。

採集年ごとの標本点数は、第二次世界大戦終結前にあたる1945年以前は計2,021点であった。1945年以前の標本点数が少ない理由としては、杉本順一氏が戦前に採集した約30万点の標本が静岡大空襲（1945年6月19日夜半から20日）により焼失したことが大きい。また、戦前標本2,021点の大半は、『植調』57卷8号で紹介したように、高等学校に所蔵されていた標本の移管品である（早川2023；早川ら2023a；2023b）。1951–1985年は年間1,910–5,902点、

表-1 ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵の維管束植物標本の点数および分類群数、採集地

採集者	標本点数	分類群数	静岡県		静岡県外		国外		不明	
			点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
杉本順一	38,989	3,662	21,297	54.6	13,909	35.7	2,663	6.8	1,120	2.9
志村義雄	10,500	742	8,170	77.8	2,290	21.8	0	0.0	40	0.4
杉野孝雄	54,029	4,247	48,883	90.5	5,136	9.5	2	0.0	8	0.0
その他	57,703	5,180	30,882	53.5	24,976	43.3	467	0.8	1,378	2.4
計	161,221	-	109,232	67.8	46,311	28.7	3,132	1.9	2,546	1.6

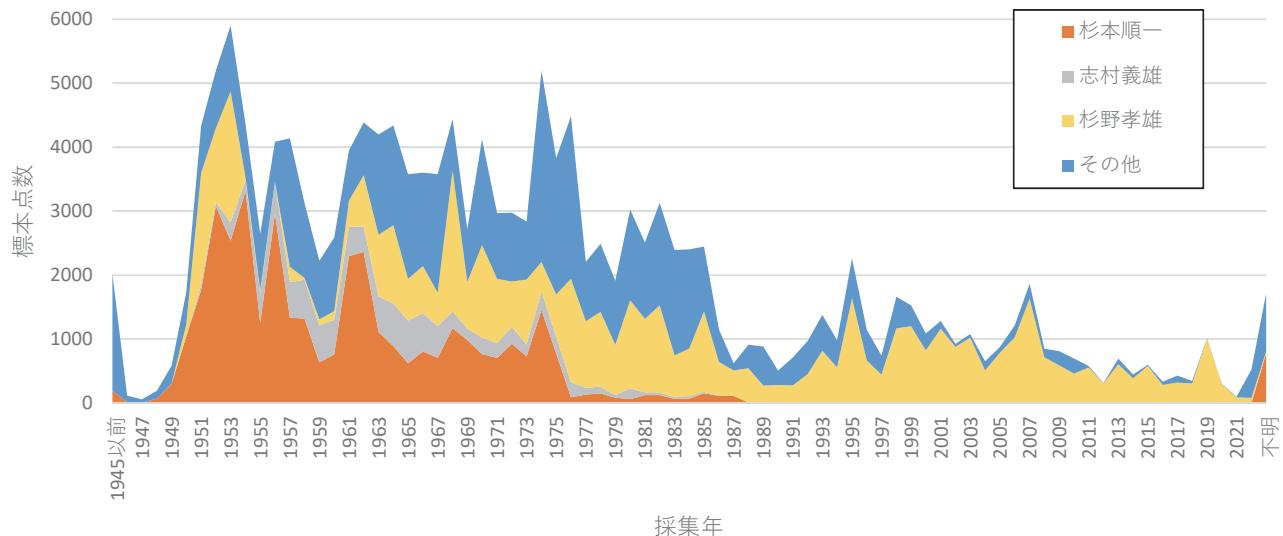


図-2 ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵の維管束植物標本の採集年ごとの標本点数

1986年以降は年間98–2,276点と、年間の採集標本点数が1950年代前半にピークを迎えて以降、緩やかな減少傾向を辿っていた(図-2)。他館では、地域植物誌の編纂などのため市民との協働を含めた精力的な調査が行われると、対象の期間・地域に膨大な数の標本が採集された例が報告されている(田中ら2017)。静岡県ではこれまで市民参加型の地域植物相調査が行われたことはなく、それは、採集標本点数が突出して多くなる時期がないことにも表れている。

今回調査できた当館所蔵の維管束植物標本の主体は、杉本順一氏、志村義雄氏、杉野孝雄氏の3名が採集したものである。3名が精力的に採集活動を行っていた1951–1985年には、「その他」の採集者を含めて、比較的多数の標本が採集されていた。1999年以降は杉野孝雄氏による採集が主体となり、「その他」の採集者による標本も年代を経るに従い減少していた(図-2)。標本採集者が少なくなっている現状は、地域の自然史の経年変化を把握する上で大きな懸念材料

となっている。「絶滅危惧種が絶滅する前に、絶滅危惧種の調査ができる人が絶滅する」という話は生物調査者でよくなされる自虐であるが、生物調査者の年齢構成も年々高くなっている現状を物語っている。

参考文献

- 早川宗志 2023. 学校に眠る雑草標本. 植調 57 (8), 30–31.
 早川宗志・杉野孝雄 2023. ふじのくに地球環境史ミュージアムの維管束植物標本の採集属性. 東海自然誌 (16), 35–38.
 早川宗志ら 2023a. 清水東高等学校から見いだされた学校教材として販売されたさく葉標本. 植物地理・分類研究 71, 33–43.
 早川宗志ら 2023b. 清水東高等学校に所蔵されていた教員や生徒により作されたさく葉標本. 東海自然誌 (16), 1–6.
 渋川浩一ら 2022. ふじのくに地球環境史ミュージアムにおける自然史標本収集保管活動の現状と課題. 東海自然誌 (15), 59–72.
 田中徳久ら 2018. 神奈川県立生命の星・地球博物館の維管束植物標本の採集属性に基づいた構成. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学) (47), 23–33.